

令和八年度 国際学級帰国生入学試験問題

令和七年十二月九日 実施

国語 (三十分)

「注意」

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は12ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、問題冊子の表紙および解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 四、きざりとタリと記入しなくてはなりません。解答は解答欄からはみ出さないように、濃くはつきり記入してください。
- 五、試験終了後、解答用紙のみ回収します。問題冊子は持ち帰ってください。
- 六、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができたりした時は、手をあげて監督の先生に知らせてください。
- 七、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一次の①～⑩について、——部のカタカナを漢字に直しなさい。

① 生活シユウカンを見直す。

② 駅前が人でコシヅツする。

③ 国文学のコウギを聞く。

④ 胃のケンサをつける。

⑤ 日本のケイザイがよくなる。

⑥ けが人をキユウゴする。

⑦ キケンな行動をやめさせる。

⑧ 車がコシヨウする。

⑨ 時代の流れにサカらう。

⑩ あわてて火をケす。

二次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

自分が「本当にしたいこと」を探していた大学三年生の「私」(典子)は、いどこで同年代の「ミチコ」とお茶を習うことを決心する。母のすすめで、「私」も昔から付き合っている武田のおばさん「こ」にお茶を習うことにした。

二回目のお稽古で初めて、例の「シヤカシヤカ」かきまわす泡立て器に触った。

「これは『茶筌』というのよ」

細く分かれた竹の穂先が、内巻きにカールしている。

おばさんは、お湯を少しだけ入れた茶碗の中で、茶筌で弧を描くと、手首をぐるりと返して、茶碗の縁にコトリと置いたり、ゆっくりと茶筌をまわしながら、鼻先まで持ち上げたり、奇妙な動作を二度繰り返した。

「は、やっていらんなさい」

私たちも、茶筌で弧を描いて手首をぐるりと返したり、茶筌を鼻先に持ち上げたりした。なんだか「お焼香」しているみたいなのな気分だった。

「……これ、なんですか？」

「ん？穂先が折れてないか、確かめてるの」

「でも、なぜ手首をぐるりとやるんですか？」

「なぜでもいいの。とにかくこうするの」

「……？」

おばさんは、白い麻布あはぬのを持ってきた。

「これは『茶巾』よ。見て」

そう言うと、小さくたたんだ茶巾を、茶碗の縁にかけて指で挟み、三度回しながら拭いた。一周全部拭き終わると、茶巾を茶碗の真ん中に置いて「ちよちよ動かした。」

「最後に、お茶碗の底に、ひらがなの『ゆ』の字を書くのよ」

「なんで？」

「なんででもいいの。いちいち『なぜ？』って聞かれると、私も困るのよね。とにかく、意味なんかわからなくてもいいから、そうするの」

① 妙な気がした。学校の先生たちは、

「今のは、いい質問だ。わからないことを鵜呑みにしてはいけない。わからなかったら、その都度、理解できるまで何度でも聞きなさい」と言ったものだった。だから私は「なぜ？」と疑問を持つのはいいことなのだと思っていた。

ところが、なんだかこゝでは勝手がちがった。

「わけなんか、どうでもいいから、とにかくこうするの。あなたたちは反発を感じるかもしれないけど、お茶って、そういうものなの」

あの「武田のおばさん」の口から、こんな言葉を聞くなんて、意外だった。

けれども、そういう時「武田のおばさん」は、なぜかとても懐かしいものでも眺めるようなまなざしをする。

「それがお茶なの。理由なんていいのよ、今は」

三回目のお稽古日。やっとお茶を点てる稽古が始まった。

(中略)

座敷に一步入ろうとすると、

「待って。お茶室に入る時は、いつも左足から入ります。それから、敷居と畳の縁は絶対に踏まないように……。さ、入って、お釜の前まで歩いていらつしやう」

(うそー！入る足まで決まってるの?)

また私は左足で、敷居を大きく跨いだ。

すると、「畳一帖を六歩で歩くようにね。七歩めで次の畳の縁を越えるのよ」

(えっ、このままじゃ、歩数が足りないー！)

急に歩幅を小さくして帳尻を合わせようと、抜き足、差し足、忍び足になった。

おばさんの隣でミチコが、声もたてずに肩を震わせ、②真つ赤な顔で、

「コソ泥みたい」

と、涙を拭いた。

私は顔が③真つ赤になつたのを感じた。

(二十歳にもなつて、ヨチヨチ歩きの赤ん坊みたいに「歩き方」から教わるなんて……。何もできないような扱いをされるなんて……。)
お茶には、うるさい作法があると噂に聞いてはいた。しかし、その細かさは想像を絶していた。

たとえば、釜から柄杓で湯を一杓くみ上げて、茶碗に注ぐという、たったそれだけのことにも、たぐさんの注意があった。

「あつ、あなた、今、お湯の表面をすくつたでしょ。お湯は、お釜の下の方からくみなさい。お茶ではね、『中水、底湯』と言って、水は真ん中、お湯は底の方からくむのよ」

(同じ釜からくむんだから、上だつて、底だつて、同じお湯じゃないの)
と思ひながらも、言われた通り、柄杓をドボンと釜の底深く沈めた。すると、

「ドボンと、音をさせないように」

「は」

くみ上げた湯を、茶碗に注ぐとすると、

「あー、お茶碗の『横』からじゃなく『前』から注ぎなさいん」

言われるままに、茶碗の「前」からお湯を注ぐ。空になった柄杓から雫がポタツ、ポタツと落ちる。その雫を早く切ろうと、柄杓をちよんちよんと振った。

「あつ、それをしちやだめ。雫が落ちるのをじつと待つ」

やることなすこと、いちいち細かく注意され、イライラしてくる。どこもかしこも、がんじがらめ。Xに振る舞える場面など一つもない。

(「武田のおばきん」て、意地悪ー)

④私は、四方八方から剣が刺さってくる小さな箱の中で、小さく縮こまっている手品師の助手になったような心境だった。

「お茶はね、まずAなのよ。先にBを作っておいて、その入れ物に、後からCが入るものなの」

(でも、Dの入っていないカラップのEを作るなんて、ただの形式主義だわ。それって、人間を鑄型にはめることでしょ？ それに、意味もわからないことを、一から十までなぞるだけなんて、創造性のカケラもないじゃないの)

私は日本の「悪しき伝統」の鑄型にはめられる気がして、「反発で爆発しそうだった。

やっと、茶筌で茶をかき混ぜる時がきて、少しホッとした。

(いくらなんでも、茶筌でかき混ぜる時くらいは、自由にさせてくれるだろう)

私は張り切って、茶筌をシャカシャカシャカ細かく振った。

「あ、あまり泡をたてないのよ」

「えっ？」

意外だった。だって、抹茶といえば、カップチーノのようにクリーミーに泡だっているではないか。

「細かい泡をこんもりたてる流派もあるんですけど、うちは、あまり泡はたてないの。泡がきれて、三日月形に、水面が見えるように点てなさい、っていつのよ」

「三日月の」

先の広がった茶筌で、いったいどうやって、泡に覆われた水面に「三日月形」を残すというのだろう？　まるで、剣豪小説に出てくる達人の「技」ではないか。

「武田のおばさん」が十五分ほどでやったお点前に、私は一時間以上もかかった。もともと、自分ではその倍に感じたほどだった。

水屋の床に、足を投げ出し、しびれきった指を折り曲げて、じんじん来るむず痒さにのたうっていること、

「これも慣れなのよ。今に何時間でも平気で正座できるようになるわよ」

何時間もなんて、とても信じられなかった。

そのとき「武田のおばさん」が言った。

「典子ちゃん、どう？　今やったことどのくらい覚えてるか、お点前もういっぺん、通してやってもらいなさいな」

足はまだじんじんしているけれど、「どのくらい覚えてるか」と言われると、対抗心がムクムク頭をもたげた。学校の成績は、まあまあだった。記憶力は悪くないつもりだ。運動神経は鈍いけど、代わりに、手先は器用だとよく言われた。

「お茶」なんて、たかが、カビくさい稽古事ですよ。そんなのチョロいわよ。結構「キミ」ところを見せて、『武田のおばさん』から「あら、あなた、結構スジがいいじゃない」って、I置かれよう

そんな欲もちょっとあった。

「はい、もう一回やってみます」

ところが……。

歩けない。どこに座ればいいのかわからない。どっちの手を出せばいいのかわからない。何を持つのか、どう持つのか……。手も足も出ないのだ。

できることなど、一つもなかった。ついさっきやったばかりのことなのに、何一つ残っていないかった。

(ほら、できないんですよ。これもできないんですよ。)

一つ一つ、念を押されているみたいだった。一から十まで指示されて、操り人形のように動くしかなかった。

「カビくさい稽古筆」と、高をくくっていたくせに……。なにが「スジがいい」だ……。

「チョロい」はずのものに、まるで歯がたたなかった。学校の成績も、今までの知識も常識も、ここでは一切通用しなかった。

「そんなにすぐに覚えられたら大変よ」

慰めるような口調で微笑んだ「武田のおばさん」の、キリッとした着物姿が、なんだか手の届かない遠くに見えた。

(いつかこの人のように、流れるようなお点前ができる日が来るのだろうか?)

その時から、⑤「武田のおばさん」は、「武田先生」になった。

そして、私の目からⅡが一枚、ポロリと落ちた。

(高きへくへつてはいけなう。ゼロになつて、習わなければ……)

ものを習つたといふことは、相手の前に、何も知らない「ゼロ」の自分を開くことなのだ。それなのに、私はなんて⑥邪魔なも^{じやま}のを持ってこ^こにいるのだらう。心のどこかで、「こんなこと簡単よ」「私はできるわ」と斜^{しや}に構えていた。私はなんて慢心^{まんしん}していたんだらう。

つまらないプライドなど、邪魔^{じやま}なお荷物^{もつと}でしかないのだ。荷物を捨て、からっぽになることだ。からっぽにならなければ、何も入ってこない。

(気持ちを入れかえて出直さなくてはいけない)

心から思った。

「私は、何も知らないのだ……」

(森下典子^{のりこ} 「日々是好日^{にちじちこれこうじつ}」お茶^{ちや}が教えてくれた15の幸せ)より

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問四 文中の「X」に当てはまることばを、本文中から漢字二字で抜き出しなさい。

問五 傍線部④「四方八方から剣が刺さってくる小さな箱の中で、小さく縮まっている手品師の助手になったような心境」とは、どのような

心境ですか。もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア まるで見世物にされているようで、恥ずかしさを感じる心境

イ 細かい作法に囲まれ、好きなように身動きできずに息苦しい心境

ウ 次々に注意され、追い詰められて、失敗が怖くておびえる心境

エ たくさん視線を浴びて、注目されることで緊張している心境

問六 文中の「A」「E」にあてはまる言葉としてもっとも適当な組み合わせを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア A形 B形 C心 D形 E心

イ A形 B心 C形 D形 E形

ウ A形 B形 C心 D心 E形

イ A心 B心 C形 D形 E心

オ A 心 B 心 C 形 D 心 E 形

問七 — 線部⑤『武田のおばさん』は、『武田先生』になった。「について以下の問いに答えなさい。

(1) 「武田のおばさん」に対する「私」の見方がこのように変わったのはなぜですか。「武田のおばさん」が「から始まるように三十字以内で答えなさい。

(2) 見方が変わった結果、「私」はお茶を習うことに対してどのような気持ちになりましたか。「〜という気持ち」に続くように二十五字以内で答えなさい。

問八 — 線部⑥「邪魔じやまなもの」とは何を指していますか。本文中から十字以内で抜き出しなさい。